

---

# AtoZ・二つの真実

一条ツカサ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A to Z・二つの真実

### 【Nコード】

N2610Q

### 【作者名】

一条ツカサ

### 【あらすじ】

T2ガイアメモリの脅威。それは風都史上最大の事件として、街に大きな傷痕を残した。これは事件の裏で語られなかった二つの物語。

## (前書き)

注意書き

この小説は『仮面ライダー FOREVER A to Z 運命のガイアメモリ』のネタバレ、及び、作者の妄想を多分に含みます。

【Sの真実／託された切り札】

気が付けば、俺は探偵事務所のカレージにいた。

シユラウド　文音を匿っていた、俺以外の人間には決して知られていない秘密の場所。

「……何故だ。俺は、もう……」

身体を見てみると、腰には巻かれたままのロストドライバー。

俺の仕事着である白のスーツには、痛々しい風穴が何発も空いていた。

翔太郎と共に運命の子を助け出した際、ミュージアムの構成員に撃たれた痕。

俺が、死んだ証。

「……どうやら、何かが起こったらしいな」

まずは、心を落ち着けよう。

これが夢や幻でないのは、肌を撫でるカレージ特有の冷たさが証明

してくれている。慌てるだけ時間の無駄だ。

ガレージを見渡してみると、別段変わった様子は無い。内装もそのままに、鉄製の床が乾いた音を立てる。ふと、文音がよく使っていた開発用のデスクに目が止まった。

「これは……」

手に取ったのは、一枚のカードだ。それ自体は取り立てるほどのものではない。だが、赤い表装に描かれていたのは

「スカル……」

ドーパントと戦う手段にして、俺が己の罪を背負った証。常識的に考えれば、それはただの紙切れに過ぎないだろう。だがスカルが写っているそのカードは、何か異彩を放っているように思えた。

（俺が蘇ったことと、何か関係が……）

とにかくこれは、一つの手掛かりだ。更にカードを調べようとす。しかし、

「!」

カードに写るスカルの輪郭から、目映いばかりの光が溢れ出した。すると、腰に巻かれたロストドライバーが、独りでに起動する。

【SKULL!!】

「何っ!?!」

スカルメモリは既に装填されていたのだろう。

黒い疾風が巻き起こり、俺の姿は骸骨を模した戦士  
仮面ライダー  
スカルに変わる。

「……全く、分からないことだらけだ」

いつものクセで帽子を被ろうとするが、そこでようやく、俺が帽子を被っていないことに気が付く。

「……ああ、そうか。アレは翔太郎に渡したんだっとな」

つい口元が緩む。

俺の死に際、翔太郎に帽子を託した時、アイツは泣いていた。ハードボイルドには程遠い半熟だが、アイツは半熟だからこそ、何かが出来る男だ。願わくば、アイツには俺と違う形で、帽子が似合う男になって欲しかったが……。

「アイツは、事務所にいるのか……？」

部屋の隅にある扉をそつと開けると、その隙間から懐かしき風景が広がった。

木造の床。応接用の赤いソファ。小さな窓から漏れる光。俺のバィブルとも言つべき作品達が詰まった本棚。

そして捜査の資料で散らかったデスクの前には

(……………翔太郎)

最後に見た時よりも、幾分か成長した弟子の姿が、そこにはあった。眉間に皺を寄せ、真剣な面持ちで思考する姿は、まさに探偵のそれ

だ。

「フィリップのヤツ……。ハア、俺はどうすりゃいいんだ……」

フィリップ。それは俺が運命の子に与えた名前。  
身を案じるような呟きから、全てを悟る。

(……そうか。お前にも相棒が出来たんだな)

素直に嬉しく思うと同時に、恐ろしくもあつた。  
あの様子とさっきの言動。詳しくは分からないが、アイツは相棒  
の真意を押し量れなくなっている。  
このままでは俺のように。 マツの心の闇に気付けなかった俺のよ  
うになってしまうだろう。

(やれやれ……。いつになっても、世話の焼ける半熟だ)

仮面の下の表情が、自然と笑みを作る。

(だが面構えだけは……。なかなかサマになってきたじゃねえか)



静かに扉を開け、顔を伏せたままの翔太郎に近付いていく。  
と、扉にかけられていた白い帽子に目がいく。鏝に傷がついたソフト帽、男の涙を隠すハードボイルドの象徴だ。

帽子を手に取り、いつものように被ったところで、翔太郎が顔を上げた。

不安げに揺れる瞳が、俺を真正面から見据える。

「スカル……？ ……おやっさん!？」

身を乗り出す翔太郎。沈黙を守ったまま、俺はデスクに置かれた本を指差す。

「俺にどうしろって……？」

皆まで言わせるなよ翔太郎。  
お前になら、分かるはずだ。  
相棒が何を考えているのか。  
お前が何をすべきなのか。

「フィリップの本……？」

N o b o d y i s P e r f e c t .  
誰も完全じゃない。

互いに理解し合い、支え合い、足りない部分を補う。それが相棒だ。

「そうか……フィリップには家族の記憶がない……。自分の母親への願望を、あの女に重ねていたのか……」

本を片手に呟く翔太郎。

文音はまだ、フィリップに自分が母親だと明かしてないようだな。

……頑固なヤツだ。俺のように、家族に触れられなくなってからでは遅いのには。

徐に帽子の位置を直すと、その手が霞み、掻き消えつつあった。特に驚きはしない。こうして少しの間でも蘇ったこと自体、奇跡なのだ。

スカルの変身を解除し、腰に巻かれたロストドライバーをテーブルに置く。

コイツはお前の成長祝い。どう使うかはお前次第だ。

消えゆく身体で、俺は翔太郎に背を向ける。

「待ってくれよ、おやつさん！」

翔太郎の声が掛かるが、俺は振り向かない。

もう俺に甘えるな、翔太郎。

俺はもうこの世にはいない人間。

そして今、風都を守る切り札はお前だ。

もうお前は、お前の罪を数えたんだろう？ なら大丈夫だ。

それを背負い、最後まで戦え。

お前になら、全てを託せる。

帽子が似合うようになった、お前になら。

「この街を頼んだぜ、翔太郎」

吹き抜ける風都の優しい風。

懐かしい街の息吹に抱かれ、俺は消えた。

【Nの真実／希望導く風】

目覚めた私の意識に、奇妙な一体感が覆い被さってきた。  
街は私の一部であり、私は街の一部。  
集中力を払えば、街の至る所に視界が移っていく。

「私は　　そうだ。私は冴子に殺されて……」

蘇ってくる記憶。

風都の風に抱かれ、霞となって消えた時の感覚まで、全て思い出すことができる。

「だがこれは……」

今の私はまるで、風都と一体になっているようだ。  
身体感覚は無いが、精神だけは確実に存在している。  
例えるなら、以前のバイラスドーパントのケースが近いかも知れない。

私は今、残留思念だけで行動しているのか

「……？　　なんだ、この声は？」

街が、泣いている。

風が運んでくる痛みが、私の心を突く。

いつもの清々しい青空は淀み、今にも涙の雨を降らしそうだ。

泣き声に耳を澄ませると、その出所は風都タワーのようだ。意識を向けると、威風堂々と聳え立つ風都タワーの景色が眼前に飛び込んでくる。

その周囲には風都の住人が集まり、固唾を呑んでメインシンボルである風車を見上げていた。

「あれは……仮面ライダーか！」

風車の下。

タワー頂上で戦う緑と黒の影。

相手は 私の知らない白い仮面ライダーだ。

(……そうか。キミ達は今も、風都の為に戦っているんだな)

街を守るヒーロー。私になれなかった、真に風都を愛する者。

力強いその姿は、私のような罪深い男には、この上なく眩しかった。

戦況は仮面ライダーが優位かに思われた。メモリチェンジを駆使し、白い仮面ライダーを圧倒。

私の知らない鳥のようなメモリを使い、勝負をかけようとした時、敵は動いた。

「させるか!!」

【ZONE!!】

ヤツが一本のメモリを取り出す。【ZONE】のメモリ。確かあれは、空間移動を可能にするメモリだった筈だ。  
ヤツの周囲には、転移してきたのだろう、合計26本ものガイアメモリが現れ、次々とヤツのメモリスロットに装填されていく。

「……なんてヤツだ。26本のガイアメモリを同時に制御するなど……!!」

不死の存在にしか出来ないような芸当をやったのけた白い仮面ライダーは、頂上の更の上、風車の柱の上に飛び上がる。

「メモリの数が違う………終わりだアアアアアア ……!!」

毒々しい緑色のオーラが、ヤツのナイフに収束。  
振り抜かれた刃は、自身の何倍もの大きさのプロペラを難なく切り落とす。

落下していくプロペラは、その真下に立つ仮面ライダーの足場を奪い、大地に引きずり降ろしていく。

「うわあああああ　　！！！」

「仮面ライダー！！！」

当然、私の叫びは届かなかった。  
身体のない思念体である私には、何もすることはできない。  
彼の手を取ることも、彼の代わりに戦うことも。

（何も、できない……っ！！）

その時、だった。

「仮面ライダー！！！」

最初は一つだけの小さな声。





風都中の風が、風都タワーに集まっていく。  
街から仮面ライダーへの声援を乗せて。

「受け取れ仮面ライダー！      キミを助けたいと願う人々の声を、  
キミ達を救う希望の風を！」

風都中の風が、俺達の周りを取り巻いていた。  
優しい、全てを包み込む心地よい風。

「フィリップ！      風が、風都の風が！」

「僕達に、力を！！」

風都の風が集まり、ベルトのエクストリームメモリの風車が回り出す。

溢れた黄金の光が、俺達を包んでいく

ポン。

不意に、肩を叩かれる。

振り向くと、そこにはもういない筈の、懐かしい姿があった。

「霧彦……？」

笑顔で、しかし無言のまま、霧彦は頷く。その姿は霞んでいて、触れれば消えそうなほど儚かった。

「風都が、街の人々が、キミ達を救おうとしている。キミ達が勝つことを信じている」

霧彦の輪郭がぼやけ、その姿がナスカドーパントと重なる。

「だから……必ず勝て。仮面ライダー」

この街を、よろしく頼む。

その言葉を最後に、霧彦は蒼い風に溶け、勢い強く俺達の周囲で吹き荒れる。

風の勢いに閉じた目を開くと、俺達の背中には、水晶のように透明な翼が靡いていた。

それは、風都を誰よりも愛した男の想いが詰まっているように思えた。

この街を、よろしく頼む、か。

「……ああ、任せとけ！」

希望の風から生まれた翼を羽ばたかせ、再び俺達は風都を泣かせる敵に向かって行った。

(後書き)

今回の小説は、劇場版仮面ライダーWを作者なりに補完してみよう  
と思い、作られた作品です。

・スカルの幻については諸説あるようですが、一番納得できるのは、  
デイクイドから貰ったカードの力、というのが一番納得いきそうだ  
ったため、ああしました。

……エターナルのマキシマムドライブが発動してるのにスカルが変  
身できた件については気にするな！

・作者はゴールデンエクストリームの翼は霧彦さんがくれたものだ  
と信じて疑いません。

ゴールデンエクストリームになる一瞬の間に、作中のようなやり取  
りがあったと思いたい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2610q/>

---

AtoZ・二つの真実

2011年1月26日07時57分発行